
アラン・ピンカートンの再誕

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラン・ピンカートンの再誕

【コード】

N9090Z

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

過疎で滅びる寸前の村の役場で働くことになった女性、山本歩美は、地域安全課の部屋で中年男の遺体を発見する。死因は凍死。部屋の温度も、別に凍死するほどの気温ではなかった。謎の事件に警察はお手上げ。歩美はそんな警察に呆れ、最近有名になった探偵、工藤学の事務所を訪れる。伝説の探偵アラン・ピンカートンの再誕ともいわれる彼が、数々の難事件を解き明かす！

第1章？

その村は、四方を山で囲まれていた。周囲の発達とは、隔離された世界。のどかな平和と残酷な過疎が、その村で同居していた。若い村人は、ほとんど存在しない。みんな都会に稼ぎに行ってしまう。よって、この村は老人ばかり。いずれ、この村は村人の死によって消滅するだろう。そんな村で、事件は発生した。

死体発見当日。この村の数少ない若者である山本歩美あゆみは、今日から働くことになる村役場の前で立ち尽くしていた。

スーツも新品だし、ネクタイもきちんとしていている。この暑いなか、ひとつもかかない汗。問題はない。だが、緊張により足が動かかなかったのだ。

女子高育ちの歩美は、男に慣れていない。なのに今日から配属される地域安全課は、中年男性一人きりだ。しかも、その男の評判はすこぶる悪い。家庭でDVドメスティック・バイオレンスを行っているとか、女性を手籠めにしたとか。なんでそんな男が地域安全課にいれるのかは不明だが、よく考えれば、こんな村で事件が起きるわけがない。つまり、窓際部署だった。

そんな男の前に、変な格好で行くわけにはいかない。何をされるかわからない。恐怖と不安が、歩美が役場に入ることを拒んでいた。

「おはよ、歩美ちゃん。」

ふいに、背後から声がかかる。振り向くと、そこには自分とは少し年が離れている女性、狩野沙耶が、笑顔を浮かべて立っていた。女の歩美でも見とれてしまうような童顔に、赤いメガネがよく似合っている。

「ああ、沙耶さん。」

沙耶の部署は、受け受け。いわゆる受付嬢だ。受付嬢は彼女のほかに、今年四十になる女性、内海恵うちみめぐみがいる。二人とも、この村では評判の美女だ。

「あなた、今日から田中さんの場所に配属でしょ？大変ね。」

沙耶が、心配そうに私を見る。田中さんというのは、例の中年男性だ。彼女も昔地域安全課だったらしいのだが、彼女はその話になると、困ったような笑みを浮かべて黙ってしまう。

「ええ。もう怖くて……。て、もうこんな時間！」

左腕に回ったピンク色の時計を見て、歩美は悲鳴を上げる。その時計には、可愛い、白い猫のマスコットキャラが描かれていた。

「ほら、早くいかないと間に合わないわよ。」

ポんと、背中を押される。歩美は慌てて、役場のドアを開いた。役場は二階建てで、地域安全課の部署は二階にある。業務開始までまだ一時間はあるが、どうどやされるかわからない。

部署の入り口まで、一気に駆け抜けた。部署の扉の前で、もう一度自分の服装を確認する。大丈夫。変なところはない。歩美は、震える手で、ドアノブを掴んだ。そして、ゆっくりとドアを開く。

「お……おはようございます……。」

返事はない。ただ部屋の奥の休憩スペースから、太い足が伸びてい

たから、休憩中だということが分かった。

部屋は、あり得ないほどに冷えていた。スーツを着ている彼女も震えるほどに。見ると、クーラーと扇風機が、全快で稼働していた。これでは、彼が風邪をひいて何をされるかわからない。

「た……田中さん？」

ゆっくりと、歩み寄る。

確かに、休憩スペースに彼はいた。
寝ている、といえば嘘になる。彼の瞳は、カッと見開かれていた。その表情に苦悶はない。肌の色は、悪いなんてものではなかった。

彼は、確かにそこにいた。

物言わぬ、『物質』となつて。

第1章? (後書き)

えっと……まず、いろいろすいません。ちなみに今回の事件のトリック、警察にでも簡単に解き明かせます。でも、警察にもわからないようなトリックを思いつくのは僕にも無理。というわけで、ご勘弁ください。

それでは、名探偵・工藤学の活躍を、ご賞味あれ。

最後に。この物語が、少しでもあなたの心を温めることを願って。

2011年12月28日。

第1章？

工藤学探偵事務所は、二階建てのビルの上部にある小さな事務所だ。一階部分はコンビニとなっていて、やはりこちらも、人気はあまりない。

事務所の所員は所長である工藤学を筆頭に、佐藤真奈、東優香、原田久美香の4人。俗にいうハーレム状態である工藤学は、外を歩くと確実に男の殺意という名の視線を集めていた。おまけに、その年齢を感じさせない若々しい見た目に惹かれた女性たちも、彼に見とれてしまう。

だが当の学は異性に関心が皆無らしく、他の所員たちのアピールもスルーし、推理に没頭している。そんな所員たちを前にして、歩美は激怒していた。

「まったく、警察は無能すぎです！」

来客用のソファアームに座ったり、地団太を踏む歩美。左右を挟むようにして座る愛奈と優香が、慌てて彼女を眺めた。八つ当たりを受けている当の工藤は、まるで他人事のように、自分のデスクの上に腰を掛けて、読書に没頭している。久美香は、そんな工藤の横で事件の概要のメモを取っていた。

「警察は、田中さんの死を凍死だと断定した直後、『あんな気温で人が凍死するわけがない！これは祟りだ』って！！馬鹿げてます！」

叫ぶ歩美。三人は呆れてばかりだが、学の場合は少し違った。本を見つめたまま、彼女に声をかける。

「馬鹿げている？」

低く、それでいて透き通るような声。それに少し焦りながらも、歩美は何度も頷いた。それをチラリとみて、工藤は、パタンと本を閉じた。

「延喜3年、平安時代の貴族菅原道真は、左大臣の藤原時平に讒訴された。しかし彼の死後、世間は天変地異に見舞われた。調停はそれを祟りとして、彼を」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9090z/>

アラン・ピンカートンの再誕

2012年1月1日03時46分発行